

道元禪師の人間観

角 田 泰 隆

二〇一七年度（第八十七回）学術大会の「共同研究テーマ」は、「人間とは何か 人間定義の新たな次元へ」であり、その趣旨は「仏教は人間をどのように定義づけてきたのか」ということにある。筆者は道元禪師の研究を専門としており、ここに「道元禪師の人間観」つまり「道元禪師が人間をどのように定義づけているのか」ということについて論じる。

一、須弥山世界にある南閼浮提

道元禪師（一一〇〇—一二五三）が人間をどのように定義づけているのかということについて、まず、私たち人間が住んでいる世界をどのような世界として捉えているのかについて触れておく。それはやはり、当時の仏教者の多くがそう信じていたであろう、インドの須弥山世界観、三千大千世界である。

『正法眼蔵』「身心学道」巻に、

山河大地といふは、山河はたとへば山水なり。大地は此処のみにあらず。山もおほかるべし、大須弥小須弥あ

り。横に処せるあり、豎に処せるあり。三千界あり、無量国あり。色にかかるあり、空にかかるあり。河もさ
らにおほかるべし、天河あり、地河あり、四大河あり、無熱池あり。北俱盧洲には四阿耨達池あり、海あり、
池あり。地はかならずしも土にあらず、土かならずしも地にあらず。（中略）空を地とせる世界もあるべきな
り。（『正法眼蔵』「身心学道」巻、大久保道舟編『道元禪師全集』上、筑摩書房、一九七〇年、三七頁。以下、
『正法眼蔵』からの引用は「巻名」と頁数のみ記す。また、漢字は旧字体を新字体に改めた）
とあるような須弥山世界が、私たちが存在する世界であり、その中の南閻浮提（南洲、南閻浮洲）が私たち人間が
住む世界である。

二、南閻浮提こそ仏法に巡り会える世界

そしてこの須弥山世界の南閻浮提こそが仏法が存在する世界であり、仏法と巡り会うことができ、菩提心を発す
ことができる世界であると、道元禪師は考えていた。

「出家功德」巻に、

世尊言、南洲有四種最勝。一見仏、二聞法、三出家、四得道。

あきらかにしるべし、この四種最勝、すなはち北洲にもすぐれ、諸天にもすぐれたり。いまわれら宿善根力に
ひかれて、最勝の身をえたり。歡喜隨喜して出家受戒すべきものなり。（『出家功德』六〇六頁）

とあるように、南洲には四つの勝れた点があると示す。それは仏に出会うことができること（見仏）、仏の教えを
聞くことができること（聞法）、出家することができること（出家）、そして真理に目覚めることができること（得
道）であり、それは他のあらゆる有情の世界より勝れているのであり、過去世の善い行いによってこの南洲に素晴

らしい人間としての身体を得て生まれてきたのであるから、大いに喜んで出家し受戒しなさいと言われる。また、「袈裟功德」巻では、お袈裟の功德を説く中で、

菩提心をおこさん人、いそぎ袈裟を受持頂戴すべし。この好世にあうて仏種をうゑざらん、かなしむべし。南洲の人身をうけて、釈迦牟尼仏の法にあふたてまつり、仏法嫡嫡の祖師にうまれあひ、単伝直指の袈裟をうけたてまつりぬべきを、むなくすごさん、かなしむべし。〔袈裟功德〕六三四頁）

と、南洲に人間として生まれてこられて仏法に出会い、その仏法を正しく伝えてきた祖師に生まれ会い、その祖師が代々伝えてきたお袈裟を頂戴することができるのに、虚しく過ごしてはならないと戒める。また「発菩提心」巻では、

この発菩提心、おほくは南洲の人身に発心すべきなり。〔発菩提心〕六四六頁）

と、南洲以外の世界でも希に菩提心を発することができるものの、南洲は寿命も短く無常を観することができると、やはり南洲が最も菩提心を発しやすい世界であるとする。

道元禪師示寂の年（建長五年（一二五三）の一月に撰述された「八大人覺」巻（法嗣の懷辨により「此釈尊最後之教勅、且先師最後之遺教也」とされる巻）においても、

仏法にあひたてまつること、無量劫にかたし。人身をうるごと、またかたし。たとひ人身をうくるといへども、三洲の人身よし。そのなかに南洲の人身すぐれたり、見仏聞法、出家得道するゆゑなり。〔八大人覺〕七二五―七二六頁）

と、人身（人間としての身体）を受けることの難しさ、そしてその中でも三洲（四洲のうち北俱盧洲を除く）の人身が良く、さらにはその中で南洲の人身が最も勝れているとし、それは先に挙げた見仏・聞法・出家・得道することができるからであるとしている。

そしてこの道元禪師の世界観の中では、以下に示すように、釈尊は今も天上界（兜率陀天）に存在して、天人を接化していると言う。

釈迦牟尼仏、自從迦葉仏所伝正法、往兜率天、化兜率陀天、于今有在。まことにしるべし、人間の釈迦は、このとき滅度現の化をしけりといへども、上天の釈迦は、于今有在にして化天するものなり。（『行仏威儀』五〇頁）

そしてまた、この世界は、六道輪廻の中の人間界であるとされる。「溪声山色」巻に、
もし菩提心をおこしてのち、六趣四生に輪転すといへども、その輪転の因縁、みな菩提の行願となるなり。

（『溪声山色』二一九頁）

という説が見られるなど、菩提心を発して後も、六趣四生に生まれ巡る存在としての私たちが説かれるのである。しかし一方で、次に示すように、世界はこれにとどまるものではなく、広狭・大小に関わるものではないとし、さらには「今」「ここ」「このこと」を生きる、時空を超えた人生観・人間観・宗教観が示されている。

学人おほくおもはく、尽乾坤といふは、この南瞻部州をいふならんと擬せられ、又この一四州をいふならんと擬せられ、ただ又神丹一國おもひにかかり、日本一國おもひにめぐるがごとし。又、尽大地といふも、ただ三千大千世界とおもふがごとし、わづかに一州一県をおもひにかくるがごとし。（『行仏威儀』四九頁）

尽十方世界は、廣大にあらざ微小にあらざ。方圓にあらざ中正にあらざ。（『一顆明珠』六〇頁）

「尽乾坤」「尽十方世界」「尽大地」などと言えば、廣大なもの、未知なるものと我々は捉えるが、廣大でもなく微小でもない。世界をそのようにばかり捉えるのではない。次に示すように「このところ」「このみち」こそが、我々の世界であり、我々の生きる場所であり、歩む道である。

うを水をゆくに、ゆけども水のきはなく、鳥そらをとぶに、とぶといへどもそらのきはなし。しかあれども、

うをとり、いまだむかしよりみづそらをはなれず。只用大のときは使大なり。要小のときは使小なり。(中略)しかあるを、水をきはめ、そらをきはめてのち、水そらをゆかんと擬する鳥魚あらんは、水にもそらにも、みちをうべからず、ところをうべからず。このところをうれば、この行李したがひて現成公案す。このみちをうれば、この行李したがひて現成公案なり。このみち、このところ、大にあらず小にあらず、自にあらず他にあらず、さきよりあるにあらず、いま現ずるにあらざるがゆゑに、かくのごとくあるなり。しかあるがごとく、人もし仏道を修證するに、得一法通一法なり、遇一行修一行なり。(「現成公案」九一—一〇頁)

この「現成公案」巻の説示は、魚と鳥の例えから、私たちも同様に、この存在する世界を究めようとするのではなく、「今」「ここ」「このこと」を一所懸命に生きていく、「今為すべきことを熱心に為す」ことこそ大切であると説く。

さて、以上は、主として、空間的な世界観について述べたが、時間的な面から述べれば、私たち人間は、永遠とも言える「遙かなる道を生きていく」ということになる。

三、積功累徳する遙かなる仏道を生きる

先に述べたように南洲は仏法に会える世界であり、この南洲に生まれ最勝の身を得たのであるから、いまわれら宿善根力にひかれて、最勝の身をえたり、歓喜隨喜して出家受戒すべきものなり。最勝の善身をいたづらにして、露命を無常の風にまかすることなかれ。出家の生生をかさねば、積功累徳ならん。(「出家功德」六〇六頁)

とあるように、私たちは出家すべきであり、出家の生生を重ねていけば、功德が積み累ねられるとし、

それ諸仏の法にあふたてまつりて出家するは、最第一の勝果報なり。（「出家功德」六一二頁）

と、出家こそ最も優れた所為であるとする。そして、三宝に出会ったならば、

すでに帰依したてまつるがときは、生生世世、在在処処に増長し、かならず積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。（「帰依仏法僧宝」六六七頁）

と、三宝に帰依し、それを生まれ変わり死に変わりの輪廻転生の中で増長し、功徳を積み重ねていき、無上正等正覺を成就するという、生生世世にわたる永遠とも言える仏道修行の道が説かれ。まさに、人間界（南洲）を場とした無窮の仏道が説かれ、その完成としての阿耨多羅三藐三菩提の成就があるのである。

道元禪師における人間とは、生生世世にわたる遙かなる仏道を歩みながら、釈尊に一步一步近づいていく存在であると言えることができる。

ところで、道元禪師に直接参じた寒巖義尹（一一一七—一三〇〇）とその教えを受けた大智祖繼（一一二九〇—一三六六）に、次のような「発願文」がある（旧字体を新字体に改めた）。

願文

参禅漢。先須起至誠心。發清淨願。於仏祖前。焼香礼拝。而白仏言。願我。此父母所生之身。回向三宝願海。一動一靜。不遺扨拭。從今身至仏身。於其中間。生生世世。出生入死。不離仏法。在在処処。広度衆生。不生疲勞。或劒樹刀山之上。或鑊湯烺炭之中。唯以斯正法眼蔵。為重担。随処作主宰。伏願。三宝証明。仏祖護念。永仁元癸巳十二月初八日

大慈寺義尹

（『続曹洞宗全書』法語・歌頌、「寒巖義尹禪師願文」一頁）

発願文

参禅漢。先須起至誠心。發清淨願。於仏祖前。焼香礼拝而白言。願我以此父母所生之身。回向三宝願海。一動

一靜。不違法拭。從今身至仏身。於其中間。世世生生。出生入死。不離仏法。在在處處。広度衆生。不生疲厭。或劍樹刀山之上。或鑊湯炉炭之中。唯是。以正法眼藏。為重担。隨處作主宰。伏願。三宝証明。仏祖護念。

〔続曹洞宗全書〕法語・歌頌、〔祇陀大智禪師逸偈〕七五九頁

「願文」が義尹のもので、「発願文」が大智のものであるが、若干異なっているものの、ほとんど同文であり、義尹の「願文」を大智が受用していたものと思われる。曹洞宗では「大智禪師発願文」として広く用いられ、『正法眼藏』の提唱などの時に読誦されている。この辺の消息については、館隆志「大智禪師発願文についての考察——義尹禪師の願文と比較して——」（『宗学研究』第四七号、二〇〇五年）に詳細な考察があるが、今はその内容について注目したいと思う。「発願文」の読み下し文と、現代語訳〈私訳〉は次のようになる。

願わくは、我れ此の父母所生の身を以て三宝の願海に回向し、一動一靜法式に違せず、今身より仏身に至るまで、その中間に於て、生生世世出生入死、仏法を離れず。在在處處、広く衆生を度して疲厭を生ぜず。或は劍樹刀山の上、或は鑊湯炉炭の中、唯だ是れ正法眼藏を以て重担と為して、隨處に主宰とならん。伏して願わくは、三宝証明、仏祖護念。

〈願うところは、父母から頂いたこの身体を仏教の誓願の道に投げ入れ、日常生活の一挙手一投足を仏の教えに違わず生き、今生の私から、遙か未来に釈尊のような仏身を成就するまで、その道のりににおいて、生まれ変わり死に変わりして様々な境遇の世界を生きていく中で、仏法を離れることなく、どのような世界にあつても、広く衆生を済度して倦むことなく、たとえそれが「劍樹刀山」「鑊湯炉炭」の地獄の世界であっても、ただ正しい教えをしつかりと担つて、隨處に主となつて生きていきたい。切に願うところは、三宝よ、私の願いが正しいことを認めたまえ、仏祖よ、私を護りたまえ。〉

また「願文」は、先に述べたように、道元禪師に直接参じた義尹によって作られ、その門下に伝承されたことが

窺われるが、その内容は、道元禪師の仏道観（修道観）と一致する。それは、仏道に限定されるものの、仏道修行者（出家者）の人間観を如実に示したものであると私は考えている。

四、結 論

道元禪師は私たち人間をどのように定義づけているのか、について簡潔に言えば、須弥山世界の南洲という素晴らしい世界、すなわち、仏法と出会い、出家し修行し得道できる世界に生まれ、この世界において生生世世にわたる遙かなる仏道を歩みながら、積功累徳し、釈尊に一步一步近づいていく（人格の完成を目指す）存在であると言えることができる。

五、附 論

1、「修証一等」と「成道」

学会での発表において、本論について質問があった。「生生世世にわたり積功累徳する遙かなる仏道」と「修証一等」との関係についてである。すなわち、道元禪師の修証観としてよく知られているのは、修（修行）のところに証（さとり）が現れるとする修証一等の修証観であり、これと、本発表での遙か未来に成道を期し、これに向かって生生世世にわたって修行するという修道観との矛盾についての質問である。

実際、私が嘗て「道元禪師の修行観——はるかなる仏道という視点——」（『駒澤短期大学仏教論集』第六号、二〇〇〇年）を発表したとき、この問題は既に指摘され、やはり道元禪師の修行観は「修証一等」にこそ特色を見出

せるのであって、「はるかなる仏道」を論する場合でも、「修証一等」に力点をおかなければならないというものであった。

それ修証はひとつにあらざとおもへる、すなはち外道の見なり。仏法には、修証これ一等なり。いまも証上の修なるゆゑに、初心の弁道すなはち本証の全体なり。かるがゆゑに、修行の用心をさづくるにも、修のほかに証をまつおもひなかれとをしふ。直指の本証なるがゆゑなるべし。すでに修の証なれば、証にきはなく、証の修なれば、修にはじめなし。（『弁道話』七三七頁）

ここに示すように道元禪師は、修（修行）と証（証果）は一等であり、修行のほかに証果を待つ思いがあつてはならないと言う。また「出家功德」巻では、

阿耨多羅三藐三菩提は、かならず出家の即日^{（一）}に成熟するなり。しかあれども、三阿僧祇劫に修証し、無量阿僧祇劫に修証するに、有辺無辺に染汚するにあらず。（『出家功德』六一一頁）

と、無上正等正覚が、出家したその日に成熟するということ。ここで注意すべきは、三阿僧祇劫・無量阿僧祇劫という無限に近い修行が条件となつてゐることである。怠りない修行が行われることが前提となつて、阿耨多羅三藐三菩提という証果が出家の即日に成熟するといわれるのである。

ところで、道元禪師においては「仏」と「菩薩」「祖」は區別して捉えられている^{（一）}。注目すべきは次の『永平広録』巻六の上堂（第四四六上堂）である。

上堂、謂仏謂祖混雜不得也。謂仏者七仏也。七仏者、莊嚴劫中三仏、謂、毘婆尸仏・尸棄仏・毘舍浮仏也。賢劫中四仏、謂、拘樓孫仏・拘那含牟尼仏・迦葉仏・釈迦牟尼仏也。此外更無称仏也。所以然者、毘婆尸仏雖有附法藏遺弟多、俱称祖師或称菩薩、未曾有乱称仏世尊。必定至尸棄仏之出世而称仏。所以行滿劫滿也。乃至尸

棄・毘舍浮等仏後、正法・像法時、亦復如是。於賢劫中、拘樓孫仏亦雖有附法藏之遺弟、相統而住持仏法、未称彼彼爲仏也。必定以拘那含牟尼仏、称仏世尊之出世也。乃至迦葉如来亦復如是、今釈迦牟尼仏法亦如是。迦葉尊者西天初祖也。菩提達磨廿八祖也。如迦葉尊者具三十相、謂、少白毫・肉髻而已。仏在迦蘭陀、与五百比丘俱。時迦葉乞食、前至仏所、却坐一面。仏言、汝年老長大志衰根弊、可捨乞食及十二頭陀、亦可受請并受長衣。迦葉曰、我不從仏教。若如来不成仏作辟支仏。辟支仏法、尽奉行蘭若行。仏言、善哉善哉、多所饒益。若迦葉行頭陀行在世者、我法久住增益人天、三惡道滅成三乘道。又迦葉聞天人称为仏師、起歎仏足云、仏是我師、我是弟子。迦葉説此語時、人天散疑。雖具如是功德、未称迦葉爲仏。又迦葉、頭陀既久鬚髮長、衣服弊來詣仏所。諸比丘起慢。仏命令就仏半坐共坐。迦葉不肯。仏言、吾有四禪禪定、息心從始至終無有耗損、迦葉亦然。吾有大慈、仁覆一切、汝亦如此、体性亦慈。吾有大悲、濟度衆生、汝亦如是。吾有四神三昧、一無形、二無量意、三清淨積、四不退転、汝亦如是。吾有六通、汝亦如是。吾有四定、一禪定、二智定、三慧定、四戒定、汝亦如是。又一婆羅門白仏、昨有婆羅門至我家、何者是。仏指迦葉。又問、此沙門、非婆羅門。仏言、沙門法律、婆羅門法律、我皆知、迦葉亦爾。迦葉功德、与我不異。何故不坐。諸比丘聞仏所讃、心驚毛豎。世尊引本因縁、昔有聖王、号文陀竭。高才絶倫。天帝欽德、遣千馬車、造闕迎王。天帝出候与王同坐。相娛樂已、送王還宮。昔迦葉、以生死座、命吾同坐。吾今成仏、以正法座報其往勲。対仏坐時、天人咸謂仏師。雖具是德、未称为仏。況乎澆季全無一德之輩、猥称吾是仏、豈免謗仏・謗法・謗僧。大愚痴也、豈免墜墮三惡中。迦葉已後至于達磨二十七世、或是羅漢、或是菩薩、伝仏世尊正法眼藏、未称为仏。所以仏是行滿作仏也。祖是解備嗣法也。仏果菩提不猥得成。明知此道理、实是仏祖嫡子也。作仏必經三阿僧企耶大劫、或必經無量無數不可思議劫、或必經一念之頃。雖有三不同、非難非易、非長遠時、非頓速時。或在拳頭裏成仏、或在拄杖頭上成仏、或在衲僧頂頸上成仏、或在衲僧眼睛裏成仏。雖然如是、作仏之劫・名号・国土・所化弟子・寿命・正法・像法、必受先仏之

記蒞也。祖師亦授此仏所記、不可乱矣。明知如斯道理、乃是仏祖正法眼藏涅槃妙心之附嘱也。大衆還要委悉這

箇道理麼。良久云、必然掃破太虚空、万別千差尽豁通、師子教兒師子訣、一齊都在画図中。(大久保道舟編

『道元禪師全集』下、筑摩書房、一九七〇年、一一四—一一六頁)

この上堂は、道元禪師が永遠の仏道を説かれていることを『正法眼藏』のみではなく『永平広録』での上堂からも確認できるものであり、また、道元禪師の「身心脱落」「大事了畢」やそれに伴う「嗣法」と、釈尊の「無上菩提の成就」の相違を述べる私の主張を証明する一論拠としても、非常に重要な上堂である。

傍線にあるように、まず「仏と祖を混同してはならない」とする。また、七仏以外は決して「仏」と称することはないとし、七仏を「仏」と称するのは「行が満ち、劫が満ちているからである」という。そして、付法藏の遺弟あつて、相続して仏法を住持するといつても、未だ仏と称さない」という語も見られる。後半においても、「迦葉より已後、達磨に至るまで二十七世、あるいはこれ羅漢、あるいはこれ菩薩、仏世尊の正法眼藏を伝うれども、未だ称して仏とせず。仏はこれ行満ち作仏する所以なり。祖は解備わり嗣法するなり。仏果、菩提、みだりに成ずることを得ず。この道理を明らかに知る、実にこれ仏祖の嫡子なり」と示される。仏は行が満ちて作仏するのであつて、祖は「解」が備わつて嗣法するのであるという。仏果・菩提は容易に成就できるものではなく、そのことを仏祖の嫡子であれば明らかに知るといのである。また、このことを明らかにするのが、正法眼藏涅槃妙心の付属であるとする。

「説心説性」卷には、次のような説示もある。

仏道は、初発心のときも仏道なり、成正覚のときも仏道なり、初中後ともに仏道なり。たとへば、万里をゆくものの、一步も千里のうちなり、千歩も千里のうちなり。初一步と千歩とことなれども、千里のおなじきがごとし。しかあるを、至愚のともがらおもふらく、学仏道の時は仏道にいたらず、果上のときのみ仏道なりと。

拳道說道をしらず、拳道行道をしらず、拳道証道をしらざるによりてかくのごとし。（『説心説性』三六一頁）

仏道の出発点である「初発心」の時も、到達点であるとされる「成正覚」の時も、最初から最後まで仏道であり、それは万里を行くものの、一歩も千里の中の一步であり、初めの一步と千歩とは異なるけれども、同じ千里の中の一步一步なのであるという。「初発心」と「成正覚」とは異なるものの、最初の一步と最後の一步は、同じ一步であり、その一步一步の歩みの中にこそ、「成正覚」があるのである。

「修証一等」とは、仏の教えに従って修行する、その修行に仏のあり方が現れていることを言うが、と同事に、修行という一步一步の歩みの中に、「成正覚」が成熟していること、一步一步の歩みなくして「成正覚」はあり得ないことをも意味するのであろう。

以上、道元禪師の「修証一等」は、生生世世にわたる遙かなる仏道という説示と矛盾するものではないと私は考える。

2、「身心一如」と「輪廻説」

本論では、道元禪師の人間観として、生生世世にわたる遙かなる仏道を歩みながら、積功累徳し、釈尊に一步一步近づいていく存在としての人間観を論じたが、生生世世にわたる存在ということになれば、そこに相続していく実体的存在を認めることになるのではないか、道元禪師は無我説ではなく輪廻説に立たれたのかどうか、ということが問題となる。

ところで、道元禪師が先尼外道の心常相減論を批判して身心一如説を主張されていることは『弁道話』や「即心是仏」巻に明示され、ほか二、三の巻にも関連する説示が見られる。ここで言う心常相減論とは、心（性）と身（相）の隔別を説き、身は滅するが心は滅することなく過去現在未来にわたって常住不変であるとする説で、この

心をまた、「心性」「靈知」「本性」「本体」「真我」等とも呼び、これらは不変であり、周遍しており鎮常なる（永遠に変わらない）ものであるとする説である。

この心常相減論批判や身心一如説によれば、道元禪師は実体的存在を否定し「無我説」に立たれたと考えられ得るが、この心常相減論批判や身心一如説にもまして、その著作全体に数多く見られるのが本論で述べた生生世世にわたる仏道観、すなわち過去現在未来にわたる生死の連続を説く教説である。そして、常識的に考えれば、この輪廻説は、実体的存在を認めずして成り立ち得ず、無我説とは相反する説であるからである。

もつとも、インド仏教思想史においても、業を担い輪廻する主体と無我説との矛盾が常に重大問題であり、この矛盾を会通することが重要課題のひとつであったとされ、そしてついに唯識瑜伽行派のアーラヤ識に至ってその解決がなされたとも言われる。とすれば、道元禪師も、実体ではなくしかも輪廻するその主体として、このアーラヤ識を認めていたのであろうか、それとも、他の何物かを考えていたのであろうか。

この問題については拙著『道元禪師の思想的研究』（春秋社、二〇一五年、第七章「身心一如説と輪廻説」四五九―四八九頁）において詳述しているが、道元禪師は、この身体とは別な、実体的な靈的存在を認めているのではないと考えられる。しかし、生死の連続あるいは輪廻を説かれている。つまり、身心一如説（心常相減論批判）を説くと同時に、輪廻説を説いているのである。輪廻説を説くためには、身から身へと輪廻する何らかの主体を認めなければならない。このことは、道元禪師において、身心一如を説くことと矛盾していなかったであろうか。道元禪師の身心一如説について述べれば、これは無我説の主張を主眼とするものではない。なぜ身心一如説を説かれたのかといえ、それは修行無用論に対する批判の中で示されたものであって、身心一如説の主張、すなわち心常相減論批判は、心常相減論→靈知即仏論→（領解解脱論→性悔帰入論）→修行無用論と、畢竟して修行無用論を批判するものであったと考えられるのである。

つまり、身とは別に、身とは隔別の、すなわち身による修行とは関わらない（身の修行を必要としない）本来清浄なる心、本来完成された円満な性の存在を否定されたのである。それは「輪廻の主体」の否定ではなく、「輪廻の主体」がもとより完全無欠なさとりとしての存在ではないということの主張であったと言える。道元禪師は、修行の功徳を積み上げていくものとして、「輪廻の主体」を認めていたと結論せざるを得ないと私は考えている。

道元禪師の「身心一如」とは何かと言えば、それは、身体的行為（＝修行。もちろん口業、意業も含むべきであろう）が、心的なもの（輪廻する主体）に密接に関わることである。ゆえに、修行の必要性を説き、積功累徳（功徳の積み重ね）の重要なことを示したのが、道元禪師の輪廻説である。であれば、道元禪師にとって、身心一如説（心常相滅論批判）と輪廻説とは決して矛盾するものではない。むしろ契合するものである。そのような結論に達するのである。

註

- (1) 石井清純氏は「道元禪師の仏・菩薩・祖の定義について」（『宗学研究』第三四号、一九九二年）において、『永平広録』巻六・第四四六上堂に注目し、「禪師は、ここにおいて「仏」と「祖（菩薩・羅漢）」とをはつきりと区別し、後者は前者にはけっして及ばぬものであると定義されている」とする。

- (2) 拙著『道元禪師の思想的研究』（春秋社、二〇一五年）、第一章「修証観」第四節「悟と証」二〇七―二二七頁。

キーワード 道元、人間観、南洲、積功累徳、遥かなる仏道